

ICOM11 参加報告書

信州大学大学院 総合医理工学研究科 総合理工学専攻
応用真菌学研究室 博士課程3年 青木 渉

開催地・期日：Beijing, China（オンライン）：2022年8月1日～8月4日

発表演題「Morphological comparison of ectomycorrhizae between *Tricholoma kakishimeji* and its allied species on pine and oak hosts」

発表日時：2022年8月1日 座長：Xubing Liu

要旨の和訳

カキシメジ (*Tricholoma kakishimeji* W. Aoki & A. Yamada) は主要毒素としてウスタル酸を含有する有毒きのこであり、本種は日本国内で長い間、形態的に類似する近縁種 (*T. stans*, *T. albobrunneum*, *T. kakishimejioides*) と混同されていた。自然林内において、これらカキシメジ類はブナ科やマツ科の樹木と関係すると考えられるが、*T. albobrunneum* と *T. kakishimejioides* はマツ属およびブナ科樹木とそれぞれ特異性を有すると考えられている。本研究では4種のカキシメジ類 (*T. kakishimeji* カキシメジ, *T. albobrunneum* マツシメジ, *T. stans* アザシメジ, *T. kakishimejioides* カキシメジモドキ) について、アカマツおよびスダジイ、コナラ、ミズナラの3種ブナ科植物を用いて *in vitro* 条件下で菌根合成実験を行った。*T. albobrunneum* はブナ科の細根上で不連続的なハルティヒネット形成が見られたが、他の *Tricholoma* 属菌3種についてはハルティヒネットが連続的に発達していた。外生菌根の菌糸体組織の形態比較では、*in vitro* 条件下と野外環境から採取した外生菌根で、菌鞘と菌糸束の菌糸配列に共通したパターンが観察された。これらの結果は、カキシメジ類の外生菌根形成に関与する菌種の遺伝的な背景を *in vitro* の実験条件下で評価できることを示している。

参加報告

報告者の発表は“Mycorrhizas in Ecosystem”のセッションで発表したが、世界各国の多くの方々にご清聴いただいた。また、発表後の質疑応答では座長の Xubing Liu 先生からご意見を賜った。発表者は英語による初めてのプレゼンテーションで、発音や文章など懸念される点が多かったため、入念な準備をして臨んだ。しかし、質問に対しては必ずしも十分な返答に至らなかった点が反省材料である。次回の ICOM12 ではぜひとも現地にて発表し意見交換をしたい。

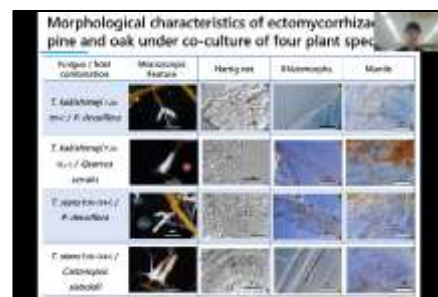


図. 動画上での発表の様子